他者からの評価・受容が現実自己と理想の重要性に及ぼす影響

—自己愛的脆弱性に着目して—

○能渡綾菜¹・清水健司²・望月聡³

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²信州大学人文学部・³法政大学現代福祉学部)

キーワード：他者からの受容，自己不一致，自己愛的脆弱性

Examining the effects of evaluated feedback or acceptance by others on self-discrepancy

Ayana NOTO¹, Kenji SHIMIZU² and Satoshi MOCHIZUKI³

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba, ²Faculty of Arts, Shinshu Univ.,

³Faculty of Social Policy and Administration, Hosei Univ.)

Key Words: acceptance by others, self-discrepancy, narcissistic vulnerability

目 的

理想自己と現実自己の差異は、不快感情と関連することが示されており(Higgins, 1987), 人はその差異を縮小しようとする。差異を縮小するプロセスとして、現実自己を高めること、理想自己を低めることが挙げられる(新井, 2001)。その過程に影響を及ぼす要因の1つとして、他者からのフィードバックが挙げられる。他者から肯定的に評価されることは、自己評価を高める(Atwater & Roush, 1994)。また、川上・石田(2011)は、他者から受容されることで理想の重要性が低下するプロセスを明らかにしている。そこで、本研究では、理想自己と現実自己の差異を縮小するものとして、他者からの評価および他者からの受容を取り上げる。前者は現実自己を高め、後者は理想の重要性を低めると予測される。

しかし、他者からの評価や受容がすべての人にとって同質の意味を持つとは限らない。他者からのフィードバックの1つとして「ほめ」が挙げられるが、青木(2005)は、従来の「ほめ」の研究がほめ手の視点から行われてきたことから、ほめられる側の視点を取り入れる重要性を指摘している。そこで、本研究では、他者からの評価や受容を受け取る側のパーソナリティに着目し、自己愛的脆弱性(上地・宮下, 2005)を取り上げる。他者に承認・賞賛や特別の配慮を求め、期待した反応が返ってこないときに心理的に不安定になりやすいという自己愛的脆弱性が高い場合、他者からの評価や受容はより一層特別な意味を持つようになると考えられる。

以上より、本研究では、他者からの受容・他者からの評価が現実自己および理想の重要性に及ぼす影響を、自己愛的脆弱性が調整するかどうかを検討した。

方 法

調査対象者 大学生 117名(男性 37名, 女性 80名, $M=20.07 \pm 1.30$ 歳)であった。

質問紙 自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地・宮下, 2009)を使用した。また、水間(1998)を参考に、理想自己を自由に3つ記述するよう求め、それらの理想を現在の自分がどの程度持っているか(現実自己)、それらの理想がどれだけ重要であるか(理想の重要性)を9件法で尋ねた。

手続き はじめに自己愛的脆弱性、現実自己および理想の重要性(Time 1)の回答を求めた。続いて、絵を用いた場面想定法により、他者からのフィードバック(他者からの受容・他者からの評価)の操作を行った。設定した場面は、理想に近づけないことを重要他者に相談する場面であり、他者からの受容条件では、「そんなところもあなたらしくていいと思うよ」、他者からの評価条件では、「全然そんなことないよ、私は真逆の印象を持っていたよ」と言われる場面を提示した。

場面の提示後に、現実自己および理想自己の重要性(Time 2)について、操作前と同様に回答を求めた。なお、他者からのフィードバックは参加者内要因であった。

結 果

まず、自己愛的脆弱性(高・低)と他者からのフィードバック(他者からの受容・他者からの評価)を独立変数、現実自己 Time 2 を従属変数、現実自己 Time 1 を共変量とした2要因共分散分析を行った。その結果、現実自己 Time 1 の主効果が認められた($F(1, 114)=108.59, p<.01$)。つまり、他者からのフィードバックにかかわらず、現実自己 Time 1 が高いとき、現実自己 Time 2 が高いことが示された。

次に、理想の重要性 Time 2 を従属変数、理想の重要性 Time 1 を共変量とし、同様に共分散分析を行った。その結果、理想の重要性 Time 1 の主効果($F(1, 114)=195.55, p<.01$)および、自己愛的脆弱性と他者からのフィードバックの交互作用が有意であった($F(1, 114)=5.10, p<.05$)。単純主効果の検定を行った結果(Figure), 自己愛的脆弱性高群において、他者からのフィードバックの単純主効果が有意であった($F(1, 114)=9.14, p<.01$)。一方で、自己愛的脆弱性低群においては、平均値に有意な差は認められなかった($F(1, 114)=.03, ns$)。

考 察

結果より、自己愛的脆弱性が高い者は、他者から評価されたときよりも、他者から受け容れられたときに、理想の重要性がより低くなることが示された。過敏型自己愛者は、劣等感や批判に対する敏感さから、自己評価を低下させる外的証拠がないことを確認する(中山, 2011)。そのため、他者からの受容がその外的証拠となり、他者からの承認を得るために不可欠だった理想から解放されたと考えられる。

本研究では理想自己を取り上げたが、自己指針には義務自己や望ましくない自己も存在する。義務自己には他者視点から反映されることから(Higgins, 1987), 他者からのフィードバックの影響をより強く受けると考えられる。また、望ましくない自己と現実自己の一致は、最も抑うつを予測する(Cheung, 1997)。そのため、今後はより包括的に自己指針を扱い、他者からのフィードバックとの関連を検討する必要がある。

Figure 理想の重要性における共分散分析結果